



遠13
1861



成慶齋

明遠 13
86
卷 2



小枝繁老人著



高野薙髮刀

蘭齋島北高馬



梓閣星衆

序

春のりの流然ちるまろく角額くふ
能優乃書をよみまろくよまろく
もよあれといふおまろくりてなきよ詞
花つりて嬉れたるのこちて悪をこぼし
善ふすまろくおまろくハ

少くも、
もとのまゝに
はるちて、
くちを
と、
ひ

中、
さ、
ち、
あ、
ち、
ひ

今もまはるるにまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

文化のつとて

小枝志きりて

碎書と色紙



勿以善小而為不



雪路 ユキヂ

勿以惡小而為



強ハ ツヨクハ



於梅 かうめ



紅粉美人愁

未散

清華公子

笑相邀

兼介 くまのすけ

高野たかの雄おとこ髮かみ刀やいば總すべ目め録ろく

弟一 二虫の情なさけ劍けんを着いて妖まじ崇しやうをなす

弟二 孝かう婦ふ子こをも持もて母ははをやしなへんとす

弟三 旅りよ僧そう大だい士し岡おか小せう刺し見けん河か拾しやく心しん

弟四 寡くわ婦ふ媼おんと貪ひんをなし禍わざはひを醸に

弟五 怨えん鬼き鈍どんとかつく奸かん夫ふを苦しむ

弟六 二思ふたごころ謀はかり小せう陷おとして不ふ義ぎの名なを稟

弟七 母子ぼし奇き遇ぐして仇あひ敵てきを討

通つう計けい七しち話わ

於お年とし女に條ぢやう傳でん

高たか野の雄おとこ髮かみ刀やいば卷まき上の上

東とう都と 歎なげ酈れい間ま士し編へん

弟一 二虫の情なさけ劍けんを着いて妖まじ崇しやうをなす

今いま昔むかし文ぶん安あんの頃ころとよ相さう州しゆう山さん内ないの鳩とよ小せう虚きよ六ろく平へい正せい秀しゆうと云い

る鍛か冶ぎあり奮ふるハ赤あか松まつ家け小せう仕しし武ぶ士したたりししど縁えん故こあり

て致つと仕せ此こゝ録ろく倉くら小せう母ぼ方ほうの血ち属じゆくたるる鍛か冶ぎあるると使もち

ままくく来きて暫しばらくくく小せうあありり然しかつつ小せう此こゝ鍛か冶ぎ男おとこ見けんる

く一人ひとりの女に見けんをますす年とし紀き虚きよ六ろく平へいと似に合あへる不ふ

ど小せう終しゆう小せうれれと娶めと親しん子この義ぎをむす結むすひ一いつ家け睦むつて榮さか也なりと



歡あはれ哀しめる人の世の習じゆて教程たゞく男辞せつ
も一一家の悲嘆大くあびたり野辺のむらとして后
虚六平ハ箕水衣を嗣専ら鍛冶の業を倣小き素此家
ハ是五郎入道正宗の成流たゞも世移人下ぬるこふ
虚六平ハ素武士たるを年長く此業を習受せぬれど
先祖小を似るべくもさく遙小劣はるるに其名も世小使
つゞ家も負くぞありたりとこと此虚六平が性直やう
小して聊も負ふ心なく一人の養母小仕ゆる小よく孝の
道をそしぬ妻ハ小坂と叫做が麻小そふ蓬と云ふ

常言のことく其容貌醜くぬのこころ心とまふかばこそ
母小仕ゆることハさうちり夫を敬ひ婦道を守りり
ハ夫妻の和睦しうして一人の男児と設けぬかゞ夫
婦ハさうちり母の喜ひ大くあはれ只是挿の花巻中
の玉とぞ慈愛なりとことハさてあは虚六平ハ我拙工
小して先祖の名を下さんこととをとおこし朝まこと
日夕小及まで生業のこふ小悔怠ど励みたりある秋の
も一免はくく一技の短劔を作らんと只顧鍛冶てあり
あう度くせの松枝小一匹の鯛鯉りと喧さる小鳴は

高野村雑記の二



蠶ハチの情シヅメ
 小コの情シヅメ
 小コの情シヅメ

高里ヤ夫

七

るも偶何と見えはるの木根より一匹の鱒錦鯛と
 ん光景みて谷とよきけく穴覗ひ寄るを鯛ハおのまを
 害きんとまふそのおのりよハ夢小だもあぬさ海小
 よく声あつたてゝ鳴いゝる小ぞ虚六平あゝ危
 いふりして鯛の逃よじと想ひまゝ只今治へる真最中
 ちよハ鍛糸く槌打しけし眺めいゝうちまゝと鱒錦
 鯛の腎小迫既小飛就小そ猛然として想ひて手小持て
 る鉄槌を投付々ハハ鱒錦も鯛も槌小中微塵小ちうつ
 失小なり虚六平とて免て心けごとくいふ小畢竟二匹

の虫の俱恙あうらんことを想ひたがら如世小及びよし
 ちよ殺生志はることをよと極らしほり作りかゝり刀ハ
 終小鍛得ぬとて其翌日小ちうりて此小鍛し短劍を
 あら研して着る小世年頃歳許の刀劍を作りと這
 劍の如く金濃ふして艶あつるハ一槌もちうりまらぬハ
 大小善い上エの研師を雇ひ磨しや小実小明晃々
 として玉あつるをくりある上品の劍となりたるハ
 焼刃の紋小鱒錦と鯛と争へる形鮮小現れし不ぞ虚
 六平甚不嘗想へらく我此劍を治へしと此鱒錦と

高野村長考

鯛と争を見と想を以留心するがとほそれ小やよりもち
 叙ハ素殺伐を主る器なりハ彼鶴鯨の殺氣小や
 わるとそちうく小劍の徳の尊ふとからん祥やら
 いざや此劍の切味の石とを試とやとそれより夾七夾
 ハの物を様しとる小剛柔の差別る斬るふと
 只是此を割よりも易のうらる小を虚六平かとらる
 喜びとる我農祖五郎入道よの治りくる劍少もあそ
 劣るまじと深く秘花して置小り真小まこ山内
 強ハと叫做的あり素ハ農夫少く富くるそのありと

其性強欲小して酒色博奕を好極め無頼の悪俗
 ありしをい小親より讓稟し由宅仁貞賤ハ酒色を衰彦
 道よの鳥小悉く失ひ今ハ博徒とちり又少く力量あれば
 相撲とり自ら任侠ありと稀近きこの少年と欺
 と白紅緑の奸計として賤賤を貪りたりとる小近
 頃虚六平不思議の良劍を治しと人の風声とるとゆ
 て忽ら虚六平よりとる至り劍を着とると望小虚
 ハ秘花の劍ありハ漫小人小見せんハ心よりと稀とはの
 悪根の強ハあそと後日いなる仇とぞ做らんとやむと

ちつて見ゆつゝ小強ハ喜びつゝの劔とちりかへつゝ好く着
 小晃々たる光も只是明鏡の面のごとく焼刃の紋ハ光
 波の溢小似つゝそのうち小鎗鯨と鯛との象解ハ見
 うつ生るごごとくおれを心裡小甚ど讚美ハ好
 く想ひたるハバババを索る小虚六平一見と詩とよ
 教許のごとく思つゝ小今まごをて往んとせざる小ぞ
 中悲るといへども難面といはん後のことといふるや
 教分りの慮を凝し詞をなふ小一冊劔少深と縁
 故あは漫小他小興へつゝと漸登く小言説く強ハ

をまじし飯志り今ハ斯く止も奸智深き強ハ後奈
 何事をう做る後ハ巻を讀得く知ん且説虚六平
 う這劔惜るるハその身故武士あるを今苓落居と
 ば人の侮り輕よるを易くぬこ小想ひいふ小として昔
 の武士とるアなんその代とおひけは然るる
 劔なつてハとおくを深く惜るるハわらふこととをバ心中
 小秘め置密小その使を索るうら此程あつて
 せしねと小一日二日うら所ありしが何ぞ料るべき漸く小
 病をもやふたつとゆふる小ぞ渾家教馬さまとひ東西

の醫師いしやを招まき薬飼やくいさせつ小用ちひゆとど露つゆももり乃
 驗しるももとと祢ねををとと何なにととせんせんとと神かみ小ちひ仏ぶつ小ちひ祈いのち只ただ顧かへり病びやうの
 おおここししんんここととををぞぞ願ねがははるる此こゝ折ひろろ一いち日にちのの夕ゆふ晚ばん
 僧そう門もんをを小ちひ站たちとと云いつつろろ負おの道ちハハ陸りく奥おくへへままりり高
 野や沙さ門もん少すくててゆゆがが今いま日にちもも日にち暮くれてて宿やどふふとと方かたななしし憐れん
 一いち夜やのの宿やどとと惠めぐみみとと乞こふふととよよりり善ぜん根こんとと事ことととせせふ
 家いへををハハ母ははたたらら出いでてて云い此こゝ不ふどど主しゆのの病びやう小ちひよよりり破やぶ生せいのの草くさ
 屋やのの荒あはれれととててもも甚いハハ格かく戲ぎとと小ちひままりりままととままとと物ものどどとと
 ちちろろくくししかかももどどととららののここととどど小ちひ厭いとめめををぞぞハハ這こ裡り

小ちひ入いりりせせめめとと聞きここゆゆるる小ちひ僧そうハハ喜よろこびび裡うち小ちひ入いりりはは母ははハハ一いち宿しゆくをを
 處ところのの塵ちりをを拂はらひひてて小ちひいいざざららひひ食しょく事じよよりりししてて何なにれ
 かからられれののここととままめめくくままりり款か待たいふふをを僧そうハハ深かくく喜よろこびび篤あつく
 謝しやしてて后のち主あつちのの病びやまひののゆゆをを問とふふ小ちひ母はは細こまゆゆふふのの光あつ景けい
 をを説い話わをを僧そう熟じゆくととらら聞きここゆゆららとと物もの愛あくくおお不
 せせらんん今いま宵よひ宿やどりりのの報い小ちひ法ほふ力ちからつつててななししといいもも高たか野の
 大だい師しのの流ながをを汲く身みををれれてて精しやうのの限かぎ病びやまひののおおとと
 ををいいてていいぬぬんんとと虚こゝろ六む平へい枕まくら辺へ小ちひ往ゆててままりりののこことと云いてて
 云いてて由よしれれハハ虚こゝろ六む平へいここととハハ謝しやししととくく祈いのちめめられれと

あゝ小僧心を得てやがて 香と薫念珠をばまゝに良
 久しく祈りて后又真言の秘文を唱へ双眼を用ふこと
 一盞茶時ありて愕然と驚き嗚呼這病ハ尋
 らば正しく物の祟ありて悩むるものなり 早く除
 ろされハ命もやと危あるる一と云小庵六平教馬
 そハ何の祟小僧やと問へ僧答く云今真言の法
 小よりよく観せざる小此家小殺氣満て其障怪
 最甚し是武門小ありてハ刺客なとの忍て穴規ふ
 の兆あり足下ハ治匠しておとせたりとハ其縮ハゆる

小あゝも想ふ小妖劍ちり貯めたるありて出
 做くとちなゆれ劍ハ素殺氣ありて此兆ありて理ち
 且若想ひ中るつき劍あゝびとて他小出して災を攘
 りくと説示せば虚六平心裡小的當し是より以彼短
 刀の所為なるんとて想ひはれども僧の言葉のあめ
 り小的中に不思議さ小少く疑想ひ々 秘り置
 たる短刀ハ前日強ハ深く望しを興へざるしり
 病めるを窺ひ人を雇ふて斯いさしむる謀りも心
 へくび然るとは他小出して益なきものもあゝび

高野産後...



高里十村長五郎



老い
仁海
虚六
平が
病根と
示す

高里十村長五郎

十三

ちのろく小欺あざむかれ一不覺ふかくとよと人小背指うしろさしとよとんも惜あはれ
 一とさわぬとよとふて云いつりたるハ師父ひその命あせとよと
 とあよべりれど杖家ぶえいへまを負おちして塵ちりむらりのひ 野のへ
 へら床あど奮うさ家いへなりとハ床あの下塵きさちりはの底そこな
 と小劔つるぎなよの理うりとあつるぢうも斗とられ床あを翌日あそ
 とく搜索さうさくやへ一今宵こよひハ夜よも更かとゆ小旅こたびの疲つかれも
 かつとせらんまづぐく寝いねとせりくと妻つま小むうひそと
 とあよハ妻心つまこころを得えと僧そうをバ一室ひとむなる知小寝しるいね一め
 けつ母ははと諸共しよとも小虚六平こよろくへい小對ひらひて云いらる今宵こよひ僧そうの

宣のたまつる劔つるぎハ響きこ小治さといあり短たんのこてやあつる一是これまど
 些ちらうりの物怪ものあやうみもたつとし小彼劔あつたと治さといひて義程ぎぢやう
 たもく病やまありハ他たと搜索さうさくまづもたつ一明日あそと彼短あつた
 刀たうを賣代うりしろとて薬くすりの價あか小志しあり是これ両ふたと良よ
 を得えべつと云いつとゆい虚六平頭こよろくへいをうらうり声こゑ
 密ひそて云い此事このこととらうて做あべつび今いまの世よの浮うコハ俗ぞくより
 も心賤こころいや一利りを貪いそふことハ蠅あの血ちを好あむと杖家ぶえい
 旧ふるき治通ちうとちうとハ必先祖かならずせんぞのうら治さとい一各劔おのづかを養やしなふ
 うと想おもひそとていて棄集うすんともる術わざもそとりたつべつ

高野 荊髮 下止

是と云く小聴くづに極くぬか母子ハ果をまどひ
 こゝろをひきし胡乱のこゝろ云ふひを聞あし 尚
 野大師ハ今も尚諸国を巡りぬ人の善不善小より
 極くの冥助冥罰を施しぬといへ 必乎誘
 びて云く各各小諫むれが虚六平あざと笑
 ひて云く婦女子を 薦り 利を貪るの使たり人の禍
 福死生ハ天小ありいづ 無情の器物小してよく人
 悩まぶと聊も肯むらむと母と妻とハ甚浅極く

悲くて尚敷く諫むむと后少きけやく返答もせざ
 る小没理會て歌小なり斯く其夜も明もて横雲
 東小とみむる時わひ僧を起出く昨夜よりの礼
 をのべ虚六平拳家のその小對ひ主翁の病深く
 心を痛めあふべさふハあし孫ど負道り言葉休
 用いあしむハ傘のほどもいさあふべきや 捜しよ
 しあふべき 劍あどあしをとくく 他小出く 然る
 とさハ病ハ傾小愈やと細申小云教へ別て 出
 去らるし

高里 兼長 下

第二 孝婦子を稱く母を養ふんとす

且説虚六平が母と妻との高野沙門の詞を篤信
 じうろくく諫むとども虚六平が命今年小限るべき
 因縁少やありん日頃ハ頑たることとす
 ら母あぶの云つることハ露をとり來るとありしが
 這回のこととをさらふ肯引ぞ今ハ漸く病も重
 心神悩乱て頼も少く見へられハ母子ハ嘆きまとい寝
 食をも忘し跡や枕小寄りして夕保おろけたり
 此時虚六平ハ重と枕をあけ母小對ひてあぶを

とらくと流し今ハや黄泉客となつぬぐをるへ鳴
 呼不孝の子ハ一期をも養ひ果しあつせし生とらや
 らそ甚心苦しうへども生者必滅の母のあひ詮
 せんべたうさ事小ハ小子がことハ露をとりも悔めを
 只く老を養天年を保んどあくと云く次子妻
 云へりたるハ我亡あふてかんニ女の身をて母人
 と幼児とを養育こと難るべけれといふもよし好
 養てたゞよ是ぞ千万部の經陀羅尼よりそより
 小増り一回をうりてはそまは是までいおんを小

高里素長石上

十六

隠しけりとも今聞かたう我昔ハ武士の數も
いりし身をりしと薄命小して苓落せしとたれ
父憐みて吾をばら此家を嗣し免すいたれど
天命免れずして貧小苦まると高恩 養母代
養ふ小心のまくなむぞ斯てるんも口惜くいふもして
故の武士小ちり母人をそめかこら小栄耀の樂を
棄らせんものをとわさふ折らう彼短刀を治得らう
天我望ととげあのみ詳なうめととてとて深く
秘置て他小出まことを惜く高野沙門の詞を聽

ぞ命を短まらふ至らう我手小作し刀の我小禰
まらハ自業自滅の因縁をば短刀の祟ること我
のりて止め一ちりあまが没後ハ劔を藏置幼
児の生育の后我志を嗣で武士とあしあは佩
さやまらう是ホのこととら外小云べきこといわら
れど彼是のこととふ心むのれ仙位を得んこと賞東
なり鳴呼心苦しや南無阿彌陀佛と唱ふる声と諸
とも小終ふらうたうありらるるぞ母と妻と一般
小捨と跡小まらうらう泣まらうとて道理あり

凡世の中おんせのちゆう小親こやこ子夫婦こゆうふうふの離別りべつを哀あはれと悲かなしみか
こ小こましてや此曹このしやうハ只ただ虚六平一人こゝろむつへいひとりの力ちからを以て飢餓きこうの
愁うしろちなく今日こんにちと易やすか送おくり〜小今いま斯かあへかく亡なび
ぬらば正ただふ是こゝろ暗夜やみ小燈ことうをうち消けし沖おき波なみ海うみ士し舟ふね
の揖ゆづりを新あらたぐる小均こひら〜愁うしろ傷きず壁かべも小物こものをくしてありける
を日頃ひこう親おや〜睦むつび〜近ちかさきの人ひとと會集かいじふ来て多おほ
方かた小云こいひかくささり漸かたやく野のをこの送おくを做し〜ふらり斯か
て累かさね七しちの日ひも經かりぬれど母ははハ年とし老おい〜身みの杖つゑも
柱しらも想おもへる子こ小後おのちと〜〜行末ゆくすゑのことなど想おもひ

〜〜の小こけけてハ己おの余あの長ながきを恨うら袂たもとの乾かわく際いまもかく
い〜〜嘆なげきさるるわど小こ涙なみだと小眼こめを哭なみだ替からそのこころ心こころさ煩わづ
ハ志こころちかりて此程このほどハ重おもき病やまひとちかりき小こハ孝うやまつ子この小こ後あと
ハ夫おつと小後おのちと〜〜着衣きぬぎの杖つゑいまで〜〜今又母いままたはは乃なり
重おもき病やまひ小こか〜〜ぬらふ小こをいよ〜〜心こころちかりき〜〜許ゆるすの衰しよ
〜〜を増ま〜薬餌やくじハ〜〜たかりか〜〜ぬこと〜〜〜只顧母ただみとの
病やまひの悔あはらんことをぞ願ねがひ〜〜〜〜〜たふ負おしし〜〜家いへちる
〜〜〜凶事きゆうじの〜重おもりぬらば母ははの病やまひと助たすハと
よる費つひた〜〜家いへハある〜〜のそのハ渾み代しろなり〜〜茶ちやの

高里新長石上

價とあしはしとハ今ハ朝夕の烟も絶く小なるものをも
 小者少しも孝養の道と衰とぞその身の針目結の
 單なるを纏ひ幼思をば背小肩をうも機織たすとして
 些わうの賃銭をとらうとけりて母の暖小着飽
 もで小食しめて仕あること一年小あまうりうまう近比
 母の病むと一重やふたういふことふや些とらうぬけ
 残一齒の悉く口ひらるほい小食することと叶をせ
 アふりり小者ハ此光景と看て甚衰しく貧しこと
 中百折千磨して日頃嗜める柔りある物を求りて

物しどと是たもはやく食せたりゆなるめぞ斯
 ことたふはとく命も危ふらんと心と苦しめたるが
 餘りの没理會小己が乳を咽見るとこれのこも其ん
 一服つしむ小者少しく心ちらん只顧進め吞めなる
 然る小おの子今年二女ありていま粒食せざるを斯母小の乳
 と與のしバ忽ち創く泣まふふと何とぞ思
 惟小母と創ままよとよとば子創事兩つ小て身む
 たら小迫りぬとびとやまもかやまもとて思ひく小想
 ひめらうとふととと兩ととと金とととと得はしと子

小親おやと易やすめざる道みちにあぬものさ不便ふびんなぐらふも此こゝ子こを
捨すてく母ははと養やしなむや心こころ既すで小こ変まめらぐらも生なまあるもの
て子こと想おもふ小親おやのなまひなるおまてや亡夫あきつなの遺く
念ねんとて只ただ此こゝ思おもむとらあるを捨すて小行おこなんとせらるる
をいふ心強こころつとき人ひとゆめあはれをたそ踽踽くくをあえさ
あしきこと今日けふと暮くれても免とら角かく小悔おこりぐらなるも母ははと
子こはいよく創つく小望のぞむつる小こを今いまはいや詮せん方かたなく自みづか
ら志こころざしを願ねがふ母はは小長谷ながたにの親おん音ね小祈いのりやべさことありて
謁えいふでびるなりといひく二ふたお小こちうりたる我われ旧ふる衣き腰こし小

いさ立たち出いではく候さうらう小此こゝ思おもむ薄命うすなみのちとを想おもひ
はくらふつけ亡夫あきつなの言ことば置おきくることを想おもひ出いで吾子わがこ
今斯いまのことくならむとぞ若憐わかたれふささ人小捨すてくを成人せいじん
の后のちいさあつ出身まうつせをせんも量はかりりたるべうの亡夫あきつなの遺命いじん
小まうせ彼短刀あなとを係かへて拵しらんゆは生の親おやの遺留物いりうぶつと想おも
ひ佩ひるおふなるあはれ亡夫あきつなの志こころざし空ひま一ひとりなるも又また
立戻たふり候さうらう小短刀あなとをとり出いで一ひと劍けんを治さへ縁故ゆかりと幻見まぼろし
の生なまれ一ひと年月としづきとを写うつつけつらぬ衣きとむとの囊ふち小
納おさめ泣なぐ家いへを出行いそぐら此夜このよは星霜せいそう月つき十日じふにちあり

高野の精舎の上

十一



小して月清小風冷つきあきらかぜひや、肌を刺はう如くなりとハこゝろ啓あきら暖あたたか小
着きる人ひとども尚なほ堪たままとおほゆる小こ菰こもハは俵はたけ小こ百家ひゃくか
衣きぬをを身み小こままししひたれハは猛もうらら骨こつ冷ひや手足てあしささ凍こて一ひと
歩あひも進すすいいぐぐここささ小こここさらら最愛さいあいののむむととりり子ことと拵とせん
と多おほざる途ちあれれをを只ただ決き小こののここかかさらられて足あしののああままの
綾あやももかくかく衝つくく初はつ更せいのの左ひだり側がは小こ長なが谷やのの觀くわん音おん堂どう小こ着ちやく
小こ々々素すよりより小こ菰こもハは此こゝ觀くわん世ぜ音おんをを保たもくく信しん一ひと奉ほうれハ
頭あたま母ははのの病やまい平ひら愈いのの行いハはいいののけけををりりぬぬ今いま宵よももままハ
其そのことこととと先まづとと一ひと次つぎ小こ吾われ子このの福ふくをを祈いのりりるるややハハ小こ

や大悲だいひのの山さん誓ちか言げん小こハハ枯からら木き小こハハ北きた咲さとと云いららるる小ここことと
佛ぶつハハ靈れい驗げん他た小こ異い共とも小こまま一ひとまましてして坂さか東とう巡めぐ礼らい才さい四し番ばん
小こここととせせぬぬ原はらハハ大だい和わのの長なが谷や小こ在ありりとと兼かね久くのの昔むかし
涪ほう水すいのの鳥とり小こ流りゅうされれぬぬ遠とほくく此こゝ鎌かま倉くらのの馬うま入い川がわ
へ漂たふ着つぬぬぬぬとと飯い山さんなるる忍しの性じやう法ぽう師しとと大だい江え廣ひろ元げんと
議ぎるる此こゝ地ち小こ安あん置ち一ひと奉ほうりり今いま斯かく目め出で度た栄えいへへままし
ままびびハハままととふふ此こゝ国くにのの衆しゆ生じやうとと濟さい度た一ひとぬぬんん方ほう便べん
ととここをを想おもひひままいいりりををひひるるれれをを母ははがが病やまいとと頓とん小こ愈いし
ぬぬままとと只ただ今いま拵とせるる子こがが身みののここ御おん佛ぶつハハああややる

ゆく護らせぬと候もふめく頼まをりて
何處へ拵せんと此寺の並なる人家の軒と東西
と徘徊躊躇せりうち三更の鐘のうらぐと音を
ひ往來の人もとなくして四方も寂寥ふなりゆく
水瀬川の流るゝ寒く等き友小後と一鳥の力
なく鳴度るゆぞ歳分くれ哀れ添まらる如此る
ばいと心もろく涙あぐる小枝子小乳房と舎
まをて云りけるハ嗚呼いとわりの吾子や今ハ親
子一世の離別あるふせめく飽まらる小乳とある也

おそひよるをば世の中ハおこるとも親小縁ありてこのハ
あらまよと像二方小して父小死別今も母ハ死別誰ハ
養ふとてそ人とたつて暮郊の稚子夜の雀昔子
を想ふハ生あるとのかなしひたるふまてや人と
して只むとりの子を拵る母が心ハ鬼より鮫よりも
恐ろしと必怨むとせど是渾る世の因縁小して
甲斐たつた奴家子と生れしとそ薄命たりり幼を
とこの小云んハよしあそそりまて小ハあれどつを
止令とておといえるがしおとが為小ハ祖母奴家

が為小母ちりり人乳のりりてハ命を保らぬをぢ
 こしわつとてハ母人を飢えしむるハ詮せんたそ小母
 憂事をもぞ做つるぞと噴く咽くて嘆きつるハ目
 あてらぬぬ光景なり小菫ハ漸く決を払ひ預て
 覚悟のことなれば心弱くて果せしと自ら心と勵
 けしとある門辺小吾子とて既小去らんとせり折
 々北風颯吹落し寒さ肌を穿てりハ幻見
 ハ猛り目と覺し呼と泣を小菫慌忙く抱とり声
 たてさしと乳と含ませる悲さ酷慮さゆりこもる

涙よむぎび抱きしり嗚呼憂恤マ道理あり互小知りれ
 親と子う長き離別を做しものを木石とて作る人小
 もあをとなし泣ぎてあぶるぞいふ負苦小迫まハ
 して吾夫此妻おまうまふかかふ嘆ハたまふをそのを
 あな煮一の吾夫や惻ら一の吾子やと口説たてつ
 声を悲泣涕しぞ嘆きかりかふ哀を心なき大の
 夜更て門をふ人の姑むを咎り大吠ゆとハ万犬猛
 りふ應ド渾一般小吠くくく四方の家くく水と怪
 み偷見やあつちとけしけし起出集會先景ふ小菫

呪的見付られどと吾児を捨跡小心にむくれど詮さ
なまふ泣くも我屋をさして飯りたり

才三

旅僧大士閣小園児を捨ふ

且説小菘ハ我家の門をこまて六飯來けきとも母の吾
子と問んとま何と答ゆべと暫一躊躇てありたる
か斯くも果べき小あし秘ををさくも裡小入まづ母
の安否を問んとその卧取小行くも小豈料と
と母ハ兩小斬と鮮血小まきとさうなかりてあり
くも少ぞ愕然とおどろき氣も消心も乱を何と

くくくそのまき屋小とくくく声のかどり泣沈と天小
悲く地小泣く既小絶入かまき積生て嘆きくく鳴呼
恨めりの毒の中や現小孝行するそのハ皇天恵のひ
福を降くゆと聞どそハ渾偽ふてやあらん奴家
愚小して聖の道をあし杯も現と大事小するこもハ
露おこくくくぞこれこそ親の為とて子を拵小行る
跡あく母人のかく浅猿と非業の死を遂多ひハこ
ハそも何の道理とて天を恨と世を嘆と此夜ハ終夜
泣あくぬさても其夜も天明ゆけど小菘ハ涙と嘆

高野聖後刀

強
虚六平
母
害



高野聖長刀

十六

小使しづみ起おきも出いずありり。程ほど小隣ことな伍曹ごそう甚た異がし。何なに事ことのあつやうんと訪まひ来きけるが小菘母こすもの屍ま小纏こまつはは
 位き居いる光景あうさまを見みて大おほ小教こがう馬ばとそふいづ小こぞとそ
 の縁故ゆかりを問とへば小菘母こすも泣なく昨夜こふの一ひと五ご十じゅうを細こまやう
 小云こ聞きゆるる邑人あつひらホその至孝しこうのほげ感かんと且かつ
 薄命うすめいなる母ははが横死よこじを憐あはれとまづ人を長谷ながせふ遣やり
 幻見まぼろしとて聞きけり志こころひる小こ昨夜こふ一人ひとりの高野たかの沙さ門もん来き
 了しるす幻見まぼろしを捨すひ何方いづかとてかゝ將いて去さりぬと
 ある小こぞ索もとべさ小由こゆなくそふ其その怪あや小こなす置お置き老ろう

母はは横死よこじの光景あうさまを保正たも小告こあ公こう訖しつ々々とも仇あを索もとんぬ
 も證ありし祢ねを空あかしく檢屍官けんしつかんをうらるるのそめて一件いっけん
 忽たちち小こ濟するるわど小老母ろうはが屍まをも邑人あつひらの情なさけとて終はつ
 一条いっの烟けむりとありり斬うりたる后のち小菘母こすもハ正ただ空そらを翔か鳥とり
 の翼つばさとてこの地ちを去さる。歎なげの足を断きてなす小こ均ひとき
 身みとたよりゆする小こ涙なみだの乾かわくむまのたのく執とく思おも惟ひり
 後のち小こ一年ひとしも満みちる小こ親夫おやあつと死し別わかれ子こ小こ生な別わかれこと
 去い小こ希まれある薄命うすめいかそとが中ちゆうの小こ母はは人ひと小こ害がいとてれ
 非命ひめい小こ亡なびぬひぬる晚く氣きさやうとてかゝと云いへ何なに

市里美長六上

者の業も知れぬハ雙々報ゆべきこととて叶ふは是傳
 ると世の因縁ありあるをうらむとらふハ前日高野沙門
 の云々ん刀の妖祟を傲むあらんかむうり祟るもの
 知りてげちたてて吾子小添て遣るべきと拵る
 道ハ失つる小綱までと移やらんとハ悲ひ出まも法橋
 叔家のまかくてあそと難面々々寧亡人の教もり末本の
 親や夫小見んものとりとく覚悟をきくし又想
 らく斯まで罪障あり身は今死小たらん小未未
 のわども恐ろしそん厭ぶべき小ありと人々の冥福

とバ誰うやく吊ん我今よりして墨の衣小次女を云云人
 の菩提ハさうありむと川小我子高野沙門小拾と
 してとあはれが彼市山小尋行ハ親子再び環舎のとも
 あらんくと忽ち志を請へ日頃信一奉り長谷寺小
 詣て住侶の僧を頼むは緑の黒髪を切拂ひ菩提
 の道小入けるハ甚殊勝ゆも賢々れ今此小虚六平
 が老母を害し立去りそのハ何者ぞと想ふ小同
 郷の悪棍強ハみぞぞるなり是何の故をりて老母
 を害せしとられば虚六平素ありとて彼短刀を

乞索々れとも興へてんしを易くぬこと小想ひしうと
 虚六平も素武士なれが強く乞んハ利害いんあらん
 と打るる如小近頃虚六平辞世はまハ心易しと喜び
 密小忍び入く彼口を奪んとせし小老母ハ驚たてり
 こゝを咎しを只一刀小斬殺し尚短刀を搜そ折る
 小菘の飯りたふる小鷲さ後の方より走り去りしちり
 故下一頭却説前日虚六平がとと小宿し高野沙門ハ
 何者小しといろろ縁故をそとてころころとるそとを
 是高野山南谷南光坊の住侶小して仁海と呼

づそのありたり此僧傳學秀方の知識して大師乃
 法燈これが為小光りと添ふべきほどふありたり一
 山ハ故近国の道俗より敬ひぬゆる小齡不惑不及
 べれと學問小暇かく大師の跡を踏なが諸国行時
 のごとくいままぜん全たるやゆり一某年西国四国を
 回国しは今年ハ東国の靈場へ詣でんとてとてとて
 倉とるる虚六平の家山ハ宿りたるとなりさても仁
 海虚六平が家を辞し陸奥の方へ卦を周く靈場
 を巡礼して飯りたまふ此羅倉とるる小長谷乃

観音堂の事小逕過ると紀日既小暮々ればと幸な
 今宵ハと小通夜さんと佛の成前小うーと
 終夜經を誦と称名してありける小三更小やあらんと
 ちがし左側成堂の最たる人家めて捨子ありと
 云もして騒ふまじひたるわど小甚憐小想ひ其處小
 往て看る小二三ちをりとおぼく清らある男児
 の賤しわらうら一扱の短刀を添て捨られたるめそ
 かり此邑の控として捨子ありとハ公小訴へを思ふとら
 是と小ありけむを這回もその法のごとくせんを

邑人の云つるを仁海うらばうらうありぬと思とむげ
 ろくも思ふ考うんハ便なりと坐小愛恋とやうくうて
 想ひたるハ我今此孤を養育てゆり僧ともなりとば
 衆許うの功德ちうんと邑人おむの貫ひ得て此處とハ
 將き去りぬとどいまむ氣かうてハ養育雖ふはり
 惱む免やせまど一角やせまどと想ふ折うと恰好夫婦
 順礼の是も一二ちをりたる女児を俱しと道づ
 とかりけるふと仁海心婚しと親志うら物くうひその
 国と聞小夫婦各りるハ小人ハ高野山の麓紙屋宿



仁海孫六
夫婦小
梅子
託

小住める孫次六と申すものゆて妻ハ尾花と叫ぶが數多見
 ともとも〜〜ゆ近頃〜〜續々悉く失ひ俵小此女見
 梅見〜〜と一人残の〜斯薄命やういそ世の作業
 悪〜〜今生小報いあると賞〜はほぶ罪障消滅の為
 且ハ三子ともらう後世の爲東西の觀世音を巡礼奉
 んと兼年西国が〜とハ順礼〜今時東国と順礼
 只今飯路小赴ゆらう〜と〜仁海并ハ我名と名告
 次小幼見の縁故と説話あ〜れ同邦の好身小此見
 と伴い飯り四五方まで養育たいひらんや〜と〜

くも頼〜〜と〜夫婦ハ仁海の芳名ハ預〜聞及び
 つ且孤と養んゆ〜無量の功德ぞと想ひ子細〜
 うけ引〜〜仁海こ〜喜〜懐中より養牧の
 黄金を取出〜と〜やう小ハおとど幼見を俱〜た
 ま〜驛路の貴多〜ん小その償ハあて〜と
 へぬ〜夫婦ハ固く辞て受〜と多方小云く漸く
 小〜云我ハ〜り信濃国善光寺へ詣〜んと想
 へ〜此処〜別〜と〜程〜帰山〜て見余の時
 今日の好意と謝〜と〜と云小夫婦〜と〜云

おぢさゝが此見のこととて
 路心ふとめめそで續々と請で
 めく我く夫婦よりく養ひ給へそむつそ世見の
 名と何と呼んといふ小仁海をそと考へて云
 たらく此見素より名あぶられども捨られしれを其
 名を知る小由かし成人やうそこの后吾大師の法流
 汲めといふ心をそと汲とそ呼べられきつたあれど
 汲と云へ文字あそめて人の名小呼んも異やうなれど
 訓同一くて目出度文字少のわねを衆と云ふ字小
 易息ととられより衆助とを呼べりたりそも此

衆助をいふ人の子ぞと相ふ小是虚六平と云ふ
 ことくこと少で小若う捨る子少ぞありけるおも仁海
 ハ斯のごとく小約しけ夫婦のとの小別をなす
 信濃路とて赴きまなり

高野雜髮刀卷上

